

故郷を離れ、そして、故郷のために

大杉の写真が北中にやってきました。市内各所で大杉の写真展が計画されている中、校区の北中生にもぜひ見てもらいたいという思いから、大湫町の方のご厚意により北中での写真展が実現しました。写真を見て、大杉のことを目と心に焼き付けてくださいね。

今日は、大杉に関わるある男性のことを知ってもらいたいと思います。

その方は一九五四年生まれ、今年度で六十七歳。大湫小学校、釜戸中学校、多治見北高校と地元で学び、その後は、東京の多摩美術大学彫刻科に進学。二十四歳の時に初めて個展を開き、彫刻家としての本格的な人生がスタートします。

その後、彫刻に関する数々の賞を受賞し、日本の有名な彫刻家としてその名を馳（は）せることになりました。その方は、倒れた大杉に寄せて、次のような文章を書いてます。

「四十八年前、小さなコミュニティの息苦しさから逃げるように東京へ行き、彫刻家となった。いつかは帰りたいと思いつけていたが、今大杉が倒れたことで、ある意味町中が沸き立っている中で、ここが自分の場所という実感が改めて湧（わ）いてきた。」

「小さなコミュニティ」は大湫町のことでしょう。彼はそこでの生活を、「息苦しい」と表現しています。若い時はだれもがそう思うものでしょうね。都会に出たい、便利な生活がしたいというのが若い時の理想なのでしょう。

彼は、次のようにも書いています。
「もし、将来的に保全のことや神社のレイアウトのために（大杉を）切り詰めて短くするのならば、切り離れた部分を僕に彫刻させてほしい。大杉でどう彫刻にするのかは、しっかり修行させてもらった。僕のアトリエでは対応できない大きさや重さかもしれないし、できたものをどう展示するかは課題となるが、大杉の存在としての特異さを全面に出すようにいい彫刻にする。」

彼は二年前に故郷の大湫に帰ってきました。かっこいい生き方ですね。故郷を離れてつけた力を、故郷のために発揮する……素敵な生き方の一つとして、ぜひ皆さんに参考にしてもらいたいと私は思います。

この方のことは、皆さん知っていますよね。えっ、知らない？じゃあ教えましょう。ヒントは下の写真です。これも知らないとちょっとひり恥ずかしい思いをするかもよ。



（十月七日 記）